

日本ロシア文学会 関西支部 会報

発行 日本ロシア文学会関西支部事務局
住所 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院 人間・環境学研究科 服部文昭 研究室
電話 075-753-6732 Email hattori.fumiaki.4x@kyoto-u.ac.jp
郵便振替口座 00960-2-48831 日本ロシア文学会関西支部

ご挨拶

中村唯史

2017年秋から2年間の任期で、関西支部長を務めることになりました。あまり積極的な性格ではないこともあって、取り立てて抱負というようなものを思いつきませんが、日本ロシア文学会とは、関心や対象や手法を異にする個々の会員が、学問的な手続きに則り、相互に敬意を保ちつつ、対等な立場で自由に自説を述べ、議論を交わし、情報を交換する場であると考えます。

支部長の仕事は、理事や運営委員や事務局の方々とともに、支部の研究発表会や会報、メーリングなどを通じて、そのような場を確保し、活性化を図ることに尽きると思います。支部会員・会友の皆さまのご理解とご協力を切にお願い申し上げます。どうぞよろしく願いいたします。

秋季総会・研究発表会の報告

2017年12月2日(土)、大阪大学(言語文化研究科)において関西支部の秋季研究発表会ならびに総会が開催されました。

研究発表会

(1) 報告者: 和田芳英氏

題目: 「なぜ昇曙夢の仕事が隠蔽されてきたか」

司会者: ヨコタ村上孝之氏

(2) 報告者: 岡野要氏

題目: 「ヴォイヴォディナ・ルシン語の無人称

述語 **нет** を含む構文について」

司会者: 岡本崇男氏

(3) パネル発表: 『ロシアの物語空間』をめぐる

「退屈な話」

発言者: 角伸明氏、榎本真奈美氏、高田映介氏

司会者: 近藤昌夫氏

支部総会

(1) 会員の異動

・入会(会友として): 宮崎衣澄氏
(日本ロシア文学会(中部支部)会員)

・退会: 前田ひろみ氏

・支部変更: 本田晃子氏
(岡山大学、関東支部より)

(2) 決算案と予算案の承認

事務局より資料に沿って説明があり、異議無く承認されました。

(3) 運営委員の承認

大平陽一氏(編集委員会委員)が編集委員長に就任し、そのため、田中大氏を後任の編集委員(関西支部では運営委員)に選任する件が支部長の提案どおり、異議無く承認されました。

(4) 次期当番校の決定

支部長から、神戸市看護大学(会場責任者:藤代節氏)にて、2018年6月9日(土)に開催の提案があり、異議無く承認されました。

(5) 日本ロシア文学会の報告

(下に、支部総会後の動きも加えた、支部長からの報告を掲載します。)

(6) 支部規約の改正等に関して

支部長から、二点、説明がなされました。
・関西支部の現時点の規約では、日本ロシア文学会の理事を選ぶことに繋がる選挙に会友が選挙権・被選挙権を持つことになっており、この点などに関しての規約改正を来年の春の総会で行いたいのので、そのための準備作業を進めたい。
・関西支部において、理事の欠員が生じたような場合に備えて、規約の整備を考えたい。日本ロシア文学会全体の動きとも関連するので、その動きを踏まえつつ、進めていきたい。

全国総会・理事会報告

2017年10月14日(土)に理事会および全国総会が上智大学四谷キャンパスで、12月17日(日)に理事会が東京大学本郷キャンパスで開催されましたので、その要点を一括して以下にご報告します。

1. 2017年度第67回全国大会が、10月14(土)、15(日)日の両日、上智大学四谷キャンパスで、1日目が144名、2日目が90名、2日間計約230名という盛況裡に開催されました。13日(金)に開催されたプレシンポ「二葉亭四迷再考」も来場者64名を数えた由です。

なお来年度第68回全国大会は、2018年10月27日(土)、28日(日)の両日、名古屋外国語大学で開催(10月26日(金)にプレシンポ)される予定です。皆さんのご参加を呼びかけます。なお、来年度大会での報告募集要項は、例年通り4月末頃に学会ホームページに掲載される見込みです。

2. 2017年10月24日(土)の定例総会で、三谷恵子会員(関東支部)が新会長に選出されました。任期は2021年全国大会までの4年間です。

その他の新役員・委員については、学会ホームページ「学会のご案内」に掲載されていますので、ご確認ください。

3. 日本ロシア文学会の助成制度として、従来の「国際交流助成」の他に、今年度から新たに「若手ワークショップ企画支援プロジェクト」が始められます。いずれの助成についても、まもなく学会ホームページに募集要項が掲載される予定ですので、ご関心のある方はそちらをご覧ください。後者については一斉メールでも周知が図られます。若手ワークショップについては、学会ホームページへの掲載が1月9日より始まっています。詳しくは、ホームページ新着情報欄の「若手ワークショップ企画支援プロジェクト 募集要項(修正あり)」(1月9日掲載)をご覧ください。

また、日本ロシア文学会では、会員が関係する種々の企画を、検討のうえで共催・協力・後援していく方向になりました。学会の経済的・人的・精神的なバックアップを希望される方は、事務局あるいは中村までご連絡ください。

4. 日本ロシア文学会の財政は、必ずしも余裕のある状況ではありません。会員の皆さまには、年度会費を延滞なく納入されるよう、お願いいたします。また維持会費(一口五千円)のご協力を歓迎します。

5. 会員の出版物(単著、編著、共著、翻訳等)を日本ロシア文学会のホームページに掲載し、情報の共有が図られていますが、広報委員会でこれらの情報を収集することは容易ではありません。

上記のような出版物を刊行された方は、書名・出版物の情報が掲載されているサイトのアドレスを、古賀義頭広報委員長ないし中村まで、ぜひともご一報ください。

以上です。次回の全国理事会は2018年7月中～下旬に開催される予定です。

支部事務局からのお願い

円滑な支部運営のために、どうぞ、会費の納入もよろしくお願いいたします。

郵便振替口座 00960-2-48831

日本ロシア文学会関西支部

*次頁以下に、研究発表会の報告要旨を掲載しています。

ヴォイヴォディナ・ルシン語の無人称述語 *нет* を含む構文について

岡野 要〔京都大学大学院〕

本報告では、セルビア北部に位置するヴォイヴォディナ自治州で話されているヴォイヴォディナ・ルシン語の無人称述語 *нет* を含む否定存在構文について考察した。ルシン語の否定存在構文では、系統的に近いロシア語やスロヴァキア語と同じように無人称述語 *нет* が用いられる。ロシア語とスロヴァキア語の否定存在構文では、無人称述語 *нет/niет* が用いられる際に意味上の主語が属格で標示される。同語源の無人称述語を用いるルシン語の否定存在構文でもこの属格構造が用いられると予想されるが、実際には否定される主体を表す名詞の性・数・意味的カテゴリーによって属格と主格 2 つのタイプの格標示があることを示した。ルシン語の無人称述語 *нет* を含む否定存在構文の格標示の分布は、以下のよう

1. 無人称述語 *нет* を含む構文において否定される主体が単数の場合、ロシア語とスロヴァキア語の否定存在構文と同じく、名詞の性および意味的カテゴリーに関わらず、意味上の主語はすべて属格で標示される—*Нет на тей твари ані гніву_{ген}, ані морщини_{ген}* 「その顔には怒りもしわもない」；*На други дзень слунечко зашвицело, а гвляка_{ген} нет у гнізде* 「翌日には日が照りだしたが、コウノトリは巢にいない」。
2. 否定される主体が複数の場合、属格標示のみを取る単数に比べて格標示の分布がやや複雑になる。意味上の主語となる主体が複数かつ無生物の場合、名詞の文法性に関わらず意味上の主語はすべて主格で標示される—*Нет пенєжи_{ном} за субвенції польопривредніком* 「農業従事者への補助金のための財源がない」；*Там нет скоро ніяки шліди_{ном} цивилизації* 「そこには文明のいかなる痕跡がほとんどありません」。但し、否定される主体が主格で標示される場合も、無人称述語 *нет* を含む否定存在構文はあくまで無人称文であるため、過去・未来時制における動詞の人称標示は、主格で標示される名詞の性・数とは一致せず無人称構文の人称標示 (=3 人称単数中性) を取る。
3. 否定される主体が複数男性名詞で、人間の意味を持つ名詞の場合、*нет* を伴う否定存在構文の意味上の主語は、常に属格で標示される—*У Керестуре за тераз нет хорих_{ген} од грипн* 「クルストゥルには現時点でインフルエンザ患者はいない」；*Там нет звишних_{ген}* 「向こうに余っている者なんていない」。
4. 否定される主体が複数男性であるが、動物や昆虫のように人間以外の有生の主体である場合、存在否定構文の意味上の主語は、複数男性人間の場合と異なり主格構造を取る—*Нет горши и глупши пси_{ном} як добермане и пиббули, (...)* 「ドーベルマンやピットブルほど悪くて馬鹿な犬はいない」。
5. 無人称述語 *нет* を含む否定存在構文の意味上の主語となる名詞の性が女性または中性で、数が複数、かつ人間・動物を含む有生の主体である場合、名詞の格標示は無生物の主体と同じように主格になる—*Углавним, вше сом мала по двацецецера дзеци и вше твердзим же таки послухни дзеци_{ном} нет, вше були на програмах најлепши* 「主に、いつも児童を 25 人ずつ担当していましたが、これほど聞き分けのいい児童はいませんし、いつも行事で一番出来が良かったです」。

ルシン語における無人称述語 *нет* を含む否定存在構文における格標示の区別は、否定される主体を表す名詞の性・数・意味的カテゴリーに大きく依存している（属格標示 = 単数有生・無生物 / 複数男性人間；主格標示 = 複数男性非人間 / 複数女性・中性 / 複数無生物）。意味上の主語が主格で標示される場合でも、構文自体は述語 *нет* を伴う無人称文としての機能を保持し、過去時制・未来時制では *не було/не будзе* のように述語動詞の形式によって無人称文であることが表示される。また、主体が代名詞で示される場合、照応される名詞の性・数・意味的カテゴリーに関わらずすべて属格で標示されることから予想できるように、ルシン語における無人称述語 *нет* を含む否定存在構文は属格構造を取っていたと考えられるが、20 世紀中ごろから名詞の性・数・意味的カテゴリーの区別が否定存在構文の格標示に現れるようになり、次第にこの区別が一般化したと考えられる。

パネル発表:『ロシアの物語空間』をめぐる「退屈な話」

発言者:角伸明、樫本真奈美、高田映介

司会進行:近藤昌夫

本パネル発表では、共著書『ロシアの物語空間』(2017年、水声社刊)を取りあげ、執筆者のうち、角伸明氏、樫本真奈美氏、高田映介氏、近藤昌夫がそれぞれの担当部分について概要を述べた。進行役は近藤が務めた。

初期高齢者のふたり(角氏・近藤)と気鋭の若手(樫本氏・高田氏)は、父の世代と子の世代の関係だが、ジェネレーション・ギャップを超えて共有されるものが「物語空間」のほかにもうひとつあった。「不安」である—今日のパネル発表はいったいどうなるのだろう…中村唯史支部長から企画のお問い合わせがあり、行き当たりばったりでかまわないのなら、と安易な気持ちでお引き受けしたのだった。

冒頭、近藤より刊行の趣旨について以下のような説明があった。

昨今大学の講義科目から文学の授業が消えつつある。外国文学など見る影もない。英米文学ばかり。ロシア文学など絶滅状態である。世間でせつかくドストエフスキーが気炎を吐いてくれても、響き合う教室がない。

「もったいない感」から、一般教養科目で使用する教科書を念頭に置いてトルストイやチェーホフをうんだ文学の魅力を紹介しようと本書の刊行に至った。しかしながら取り上げたのは、日本でもポピュラーな19世紀の古典作家から現在活躍中の若手作家を含む一握りの作家であったので(14人)、関心を持たれた読者のために、巻末に先達の労作一覧(主要参考文献欄)および、雑駁ではあるが略年表欄を設け、全体を俯瞰できるよう配慮した。また、出版までに、進行役の所属先の一般教養科目(公募制)で2年間講義を行い、準備期間を設けた等々。

以上の説明の後、各執筆者が掲載順にそれぞれの論文の主旨を順次述べはじめた。巻頭を飾った樫本氏の、噛んで含めるような『大尉の娘』論を皮切りに、たとえば近藤は、ゴーゴリの『鼻』の夢のリアリティについて、いわゆる「夢オチ」が等閑視されているが、『肖像画』においてメタフィクショナルな手法で夢と現実をすり替えたゴーゴリであれば、暦の異なるふたつの日付が示すように、「生神女福音祭／大地開きの日」のグリャーニエの原理(世界の相対化)が発動し、「МИР(ペテルブルクはカザン聖堂の現実世界)／СОН(眠り)」が「РИМ(ローマはサン・ピエトロ寺院)／НОС」という夢と願望に反転され、コワリョフの顔に新しい鼻が下がったのだろう、と述べた。

続いて角氏がツルゲーネフについて、ツルゲーネフは、人生を冷静に観察し美しい調和の世界に身を置く作家であるという伝説が流布しているが、『獵人日記』には自由で情熱的で社会の枠に収まらない強烈な個性を持つ人物達が描かれており、合理的ならざるロシア的情熱と感性によって独自の個性を放つ短編集となっている。また、『獵人日記』の中の自然描写は、他の作家の追従を許さない、読者を驚きと発見に満ちた体験に引き込む自然描写となっている、と述べた。

こうして、プーシキン、レーンモントフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、トルストイ、そして初期チェーホフと順番に発表が進んだところで、後期チェーホフを取りあげた高田氏から、そもそもシナリオのないパネル発表なのだから、掲載順に進めるよりもことに思い入れのある作品に絞って語りたいとの提案があり、掉尾を飾るアナイト・グリゴリヤンの物語空間について、熱のこもった解説がなされた。

高田氏によれば、グリゴリヤンの『長い夏』は、20世紀の90年代のロシア農村を現実的に描きつつも、典型的・文学的な「村」表象を用いている。この「どこでもない場所の真ん中」で、少女たちは空想を語り、あたかも空想の中で実際に生きる。そのような少女たちのひと夏は、ほぼ全てが歴史的現在形で伝えられることによって時系列を成し得ない奇妙な断片となる。このようにして作品は現と幻、真と偽の境を軽やかに行き来するような、独自の特徴を獲得している、と作品世界の魅力を語った。

こうして、父の世代が凡庸に進めていった時系列順の進行が、子の世代によって文字通り断片化されたことで、パネル発表自体に弾みがついたことは言を俟たない。

発言は、高田氏から榎本氏のツヴェターエフ論に転じ、氏は、永遠をキーワードに、プーシキン像からマレーヴィチの『黒い正方形』へ、さらに「海」へと鮮やかに飛翔するツヴェターエフへの思いを語った。

榎本氏によれば、詩人ツヴェターエフの散文『わがプーシキン』は、ロシアの国民的詩人プーシキンの没後百年祭に合わせて書かれた。様々なプーシキン体験が断章形式で記されており、詩人の「言葉」で奥行きを増したテキスト空間で、プーシキンは普遍性を帯びた無限に豊かな形象としてあらわれている。本論では、ツヴェターエフの詩的言語に迫りながらテキストの深層に迫った、と力強く述べられた。

若手の発言を受け、角氏から、グリゴリヤン氏が影響を受けた古典文学の作家の名前にツルゲーネフの名はないが(グリゴリヤン氏はドストエフスキー、トルストイ、チェーホフそしてレスコフに影響を受けたという)、『長い夏』はツルゲーネフの『獵人日記』の中の『ベージン草原』とそっくりだ、ツルゲーネフとも関連があるのではないかとの新たな指摘があった。この指摘によって最終章が古典文学作品を取りあげた前半部と貫流し、本書がそれなりにひとつの読み物に仕上がっていることが判明した。

これは、今回の機会がなければ、おそらく自分の担当箇所以外に目を通すことはなかったであろう、当の執筆者たちも気づかなかったことであり、代表してこの場を借りて謝意を表したい。

フロアからは、テキストの偏執的な読み込みに評価の声があったほか、講義と受講者の反応に関する質問があった。それにたいしては一例として、ツヴェターエフの講義を受講した学生が、学外の出講先まで榎本氏を訪ねたことが紹介された。(文責・近藤昌夫)

* 和田芳英氏の報告要旨は今号には掲載されません。